

調査の大概：東・北インドの踏査

東西交渉史研究会

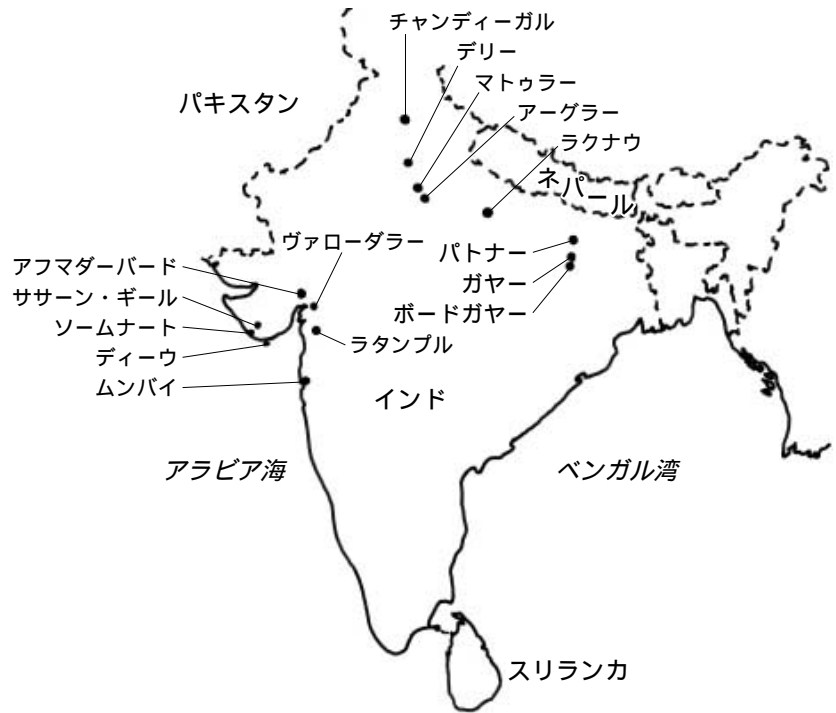
はじめに

東西交渉史研究会によるインド調査は、仏教美術とヒンドゥー教信仰、そしてアフリカ系インド人スィッディーに関する資料収集を目的として実施された。調査期間は、2004年2月18日から3月20日までの約1ヶ月間である。その内、東インドから北インドにかけての仏教美術調査を前半部として2月18日から29日までの11日間にあてた。ニューデリーを拠点にした調査をはさんで、後半部は3月4日から3月19日までを西インドでの宗教および人類学的調査に費やした。

本研究会からの参加者は、イメージ文化学科（以下Z学科）所属の総合文化研究所特別研究員、前田たつひこと村山和之であった。加えて、調査協力者として4人の有志学生がいた。本学卒業生で2002年度イラン調査⁽¹⁾にも参加した美術史専攻の佐藤裕美（パリ留学中）を筆頭に、南アジア文化人類学を専攻する東聖子（本学大学院生）、宗教美術・芸能を学ぶ萩野亮（同Z学科学部生）、そしてインドの民芸に惹かれる福光文（同Z学科学部生）である。研究会代表の松枝到および北進一（Z学科講師）は、今回の調査日程ではどうしても参加が難しく日本に留まった。そして、井上明日香（Z学科学部生）は、調査隊との連絡業務など総務的役割を担って残ることとなった。

もう1人、研究会のメンバーではないが本インド調査を実質的に支えてくれたのが、インド出身の野口リンジンドルマギャリ（Z学科講師）である。短期間で多数の調査地を訪問すること、学生になるべく経済的負担をかけないこと、この2つの条件を満たすには、事前にインドの旅行代理店と交渉して旅程と予算を組み上げる必要があった。野口は、ニューデリーとボードガ

(1) この調査は「アラビア海東域の港湾都市をめぐる文化・民族複合の実態調査」プロジェクト（代表：渋谷利雄）として、イラン、パキスタン、インド、スリランカで実施された。前田たつひこ、山内和也、村山和之そして佐藤裕美は、イラン調査に参加した。調査報告は、「第2部ペルシア港湾都市にみる対ヨーロッパ文化接触の形跡をめぐって」『東西南北・別冊04：アラビア海の文化誌』pp.59-107 和光大学総合文化研究所（2002年）を参照。



ヤーに事務所を構え、仏跡旅行の手配に実績がある旅行社「中道旅行 (Middle Path Travel)」との仲介役を担当した。その結果、難問であった条件が満たされ、安心してインドへ出発できたのである。

本インド調査の学内における報告は、2004年5月22日(土)に和光大学J104教室において、「インドの美術と信仰：東西交渉史研究会インド調査報告」として行われた(図1)。学内外から多くの参会者⁽²⁾を得て、調査の成果に対して活発な討議が交わされた。構成は2部からなり、第1部は学生による報告⁽³⁾(東聖子「西インド：女神の聖地を訪ねて」、萩野亮「東インド：仏陀の聖地を訪ねて」、福光文「生活の中の工芸」、休憩をはさんで、第2部が教員による報告(村山和之「インドのアフリカ人について」、前田たつひこ「二つの都の仏教美術—マトゥラーとカピサの関係をめぐって—」、北進一「伝説の中のボードガヤー—飾られた仏陀と宝冠仏への視座—」)からなる。

(2) 小西正捷(立教大学名誉教授)、中村忠男(立命館大学助教授)、ヨアヒム・カール・パウチェ(本学Z学科教授)、櫻本陽一(本学人間関係学科専任講師)、翁長巳酉(パーカッションスト)、飯田一男(アリオン音楽財団)、石川まゆみ(デリー大学留学生)。本学学生のほか、オープンカレッジばいいていあ受講生の多数参加を得た。

(3) バリ留学中の佐藤は、フィールドノートと写真情報を提供して報告会に協力した。

インドの美術と信仰



東西交渉史研究会は、南・西アジアを対象に研究活動を行っています。今回は本年の春、インドで行った調査から、新資料や新たな交流などに恵まれた訪問の成果を紹介したいと思います。学内・学外、教職員・学生を問わず、ふるってご参加下さい。

日 時

5月22日(土)午後2時～

場 所

和光大学 J-104 教室にて

<第一部>

1. 西インド：女神の聖地を訪ねて
東 聖子（本学大学院生）
2. 東インド：仏陀の聖地を訪ねて
萩野 亮（本学学部生）
3. 生活のなかの工芸品
福光 文（本学学部生）

<第二部>

1. インドのアフリカ人について
村山和之（研究所特別研究員）
2. 二つの都の仏教美術 ―マトウラーとカピサの懸殊をめぐって
前田龍彦（研究所特別研究員）
3. 伝説のなかのボードガヤー―舞られた仏陀と宝鏡仏への模倣
北 遼一（表現学部非常勤）

連絡先：町田市金井町 2160 和光大学
総合文化研究所 (044-989-7478)

図1 報告会のポスター

会終了後は、図書館会議室で懇親会が開かれた。

以下に、調査行程を記しインド調査の大概としたい。ここでは、計6名全員での合同調査、つまり調査前半部分について扱う。調査後半の行程は「西インド：女神の聖地を訪ねて」（松枝到・東聖子）を参照されたい。

前半部の調査行程

2月18日 ニューデリー集合 New Delhi

成田空港第2ターミナルに集合。前田、村山、東、萩野、福光、井上。エア・インディア（AI 305）ムンバイ行きで5人はニューデリーへ。幸運にも飛行機は定刻12時に出発した。バンコック経由で、20時40分、インディラ・ガンディー国際空港到着。気温は20度。ミドル・パトゥ・トラベル社が到着ゲートでピックアップ。国内線ターミナルに近いホテル・エアポートにチェックインする。ここで、旅行代金を全員から集めて払い旅程の確認をする。今回は、ホテル予約と車の借り上げ等の手配は全て旅行社に任せることにした。自由旅行の要領で、現地で探していると限られた時間内で予定を消化できないからだ。確認してみると、ラクナウのホテル代金だけは現地で自分たちで支払い、ニューデリーに戻ったときに旅行社に精算させることになる。パリを発し、ウィーン経由で定刻通りニューデリーに着いた佐藤が、旅行社の車で無事合流したのは深夜12時少し前であった。再会を喜びと同時に、初対面の学生たちとの挨拶交換。就寝前に空港近くを散策する。

2月19日 パトナーへ移動 Patna

8時。ホテル近くの安食堂にて全員で朝食。パラータ（揚げパン）とチャイという典型的な北インド風朝食である。東はパラータ作りに挑戦していた。朝食後ホテル近くを散歩し、門を入り口とした居住区を歩く。

9時。ホテルの車で空港へ出発。ほとんどのメンバーにとって、本格的なインド旅行がいよいよスタートする。インド国内航空（IC 809）にてビハール州都パトナーへ飛ぶ。10時40分、定刻離陸。機内食が予想以上に美味であった。12時40分、支流を集めて太くなったガンガー川を右手に見ながらパトナーに到着。空港ビルは小さい。迎車2台に分乗してパトナーの街中にあるホテル・ラージャスターンにチェックイン。どこにでもある、インドの田舎の大都市といった印象の町である。14時30分、前田を先頭に、徒歩で州立博物館へ行く。広い公園の中にイギリス風建築の博物館があった。ちょうど春の花が咲いていて美しい。入場料1人5ルピー、ただし館内写真撮影は禁止。16時20分に博物館調査終了。途中、喫茶休憩をはさんで17時25分ホテル着。19時、近所のインド料理屋で夕食。佐藤の誕生日も重なり誕生会となる。

2月20日 ボードガヤーへ移動 Patna to Bodh Gaya

ホテルは朝食付であったので、各自出発まで朝食をとる。この日のハイヤーは、宿泊ホテルの迎車でボードガヤーから走ってくるという。午前中は、パートナーにおいてマウルヤ朝マガダ王国の都パターリプトラの遺跡「クムラーハール」と、ガンガー川辺にイギリスが建てた巨大な半球型倉庫「ゴールガル」を見学する。11時45分、ホテルをチェックアウトして、ブッダも歩いたであろう道を思い浮かべながらボードガヤーへと向かう。およそ20分で、郊外に出、ガヤー方面へ真っ直ぐに伸びる道を南下する。レンガ工場、養蜂屋、そして一面の菜の花畑が展開する。12時46分、道沿いの茶店にて名菓ライ *Lai* を食す。ちょうどシヴァ神の大祭中だったので、牛車や徒歩で縁日に向かう村人をたくさん見かけた。13時38分、ジャハーナーバード駅通過。ガヤーまでおよそ25キロの距離に位置するカタネ村では、交通事故が原因で村の男衆が憤っていて通行止め状態であった。ガヤーから警察署長が出向いて、解決するまで3時間半足止めをくらう。17時58分、出発できる。18時28分、暗くなるとほぼ同時にガヤー Gaya の町を通過。18時56分、ボードガヤー Bodh Gaya の村に入り、19時には今夜の宿ホテル・タターガト・インターナショナル（仏陀ホテル）に到着。大菩提寺の真裏という恵まれた立地の、きれいなホテルである。チベット系の従業員もいる。ホテルでインド風中華料理の夕食。電飾が輝く大菩提寺と参道の夜店を楽しみ、散歩して就寝。

2月21日 ボードガヤー調査 Bodh Gaya

7時、大菩提寺（マハーボーディー寺）（図2）。自由行動中の前田、村山、佐藤は朝日に照らされる黄金の仏陀像に参拝。参道の食堂で定食（ターリー）



図2 マハーボーディー寺院

を朝から食べる。9時半から12時まで、体調不良の萩野を静養させ、残り5人で大菩提寺調査。玄奘の記述に残る触地印を結び、宝冠をつけた仏陀像を探しビデオとカメラで記録する。北が分担する報告に必要な資料収集作業であった。敷地内にあ

る仏陀が悟りを開いた
菩提樹、仏足石(図3)、
アショカ王柱、ムチ
ャリング竜王の池も見
て回る。昼食をはさん
で、考古学博物館調査。
写真撮影禁止のため、
触地印宝冠仏は確認作
業のみ。スケッチによ
る記録作業は福光が担
当。15時21分、水のな
いネーランジャンー川



図3 菩提樹の下の仏足石

を渡って、スジャータの村を訪ねる。ストゥーパの発掘作業中であった。緑
の麦畑の畦を歩いてスジャータ寺を参拝。16時38分、村を出発しスワヒリ語
で「ゆっくり」という意味のボレボレ・レストランで休憩。ホテルで休憩と
夕食。20時20分、ホテルの車でガヤー駅へ。ジャンムー・タウィー急行でウ
ッタール・プラデーシュ州都ラクナウに向かうのだ。20時48分、ガヤー駅着。
突然、列車の入線プラットフォーム変更のアナウンスが(ヒンディー語のみ
で!)入り、乗客が暗い跨線橋に殺到する。21時15分、定刻通り列車は出発。
AC付3段寝台には、シーツ、毛布、枕が配られた。夜汽車の旅。

2月22日 ラクナウ Lucknow

10時25分が到着予定時間だったが、ラクナウに着いたのは12時43分であっ
た。明日が月曜で博物館は休みになるので、今日中に調査をしなくてはなら
ない。イスラーム建築風の広い駅舎内の食堂で昼食。オートバイ乗り合いタ
クシー(オートリキシャー)で、宿泊予定のカールトン・ホテルへ。コロニ
アル風の古いホテルで、中庭では結婚パーティーの準備がされている。大き
な2部屋は壁の扉でつながっている。かつては町で1番の高級ホテルだった
はずだ。博物館と動物園を含む大きな公園施設は家族連れで溢れかえってい
た。ところが、肝心の州立博物館は特別休館だという。何でも「ポリオ記念
の日曜日 Polio Raviwar」という記念日に当たってしまったのだ。博物館の入
り口は開いていながら、見学はできないというところを、しつこく粘ってエ
ントランスホールの陳列品を見学。仕方がないので、再訪問も日程に考え直
すこととし、動物園でトラと象を見る。象の世話係も象と同じ敷地に小屋が

あって住んでいるのには驚いた。さすがはインドである。ラクナウは、16世紀からペルシア系のシーア派藩王国アワド Awadh が栄えた都であった。インドでも高名なアワド宮廷料理を食べてみたいと予定に入れていたが、思いがけなく我々のホテルの中庭で行われるヒンドゥー教徒の婚姻儀礼と食事に招待され、計画を変更。ビデオと写真で儀式を記録する(挿絵)。立食披露宴のメニューは、まさにアワド宮廷料理であった。肉料理が絶品であった。

2月23日 ラクナウ Lucknow

朝食は、ホテルの中庭でとる。発熱があった福光を休ませ、ラクナウの宗教施設見学に出かける。9時40分、ホテルから徒歩5分の距離にあるシーア派特有の礼拝施設イマームバーラー Imambara へ行く。イマームバーラー・シャーナジャフ内には、ランプがたくさん吊り下げられ、王族の墓所も設けられていた。おりしも、イスラーム暦で1月(ムハッラム月 Muharram)、シーア派信者にとっては、宗教的指導者イマーム・フサインがイラクのカルバラーで殉教したことを記念する服喪行事が行われていた。

10時37分、自転車タクシー(サイクルリキシャー)で、この町を代表するバラ(大)・イマームバーラーへ行く(図4)。11時に到着。ここは、王家の紋章である一對の魚が門に刻まれ、ペルシア的な庭園や、巨大なモスクを併設している。藩王(ナワーブ)の墓石も設けられた広いイマームバーラー内の上階部は迷宮になっていて、ガイドなしでは見学できない。ガイドは雇う価値あり。屋上から望むラクナウ旧市街、ゴームティー川は絶景。モスクのミナレットから礼拝の呼びかけアザーンが響き渡り、インドの時代映画のようであった。



図4 大・イマームバーラー

古い井戸を見学して、13時10分、ルーミー門から馬車で、旧市街を代表する庶民のマーケット、チョーク・バザールへ行く(図5)。チョークでは、庶民が愛するアワド宮廷料理トゥンダー・カバープの店を探して昼食。店に着くまでの一本道は、

ラクナウ名物のチカン
刺繍や香水の店が軒を
連ねる。カバブは一口大のハンバーグ状で、
薄いパンに包んで食す。
口の中で肉がとけ、美味の上、安い。

15時ホテルに戻り、
出発の準備。17時、チェックアウトし、オートリキシャーでラクナウ駅に向かう。アーグラ行きのターミナルは、日本と同じ狭軌路線の出発点であった。17時20分、駅到着。17時22分、アーグラ急行 Agra Exp. が入線し全員乗車(図6)。先日の広軌路線のコンパートメントに比べて狭さが実感できる。4人と2人に席が分かれた。18時17分、出発。



図5 チョーク・バザールの雑踏



図6 列車のサイドボード

2月24日 マトゥラー～アーグラ Mathura, Agra Fort

豊かな農村地帯を走りぬけ、ヤムナー川の鉄橋を渡って列車は、8時24分、マトゥラー駅 Mathura Junction に到着。デリーから走ってきたスィク教徒運転手のワゴンに乗車。8時48分、クリシュナ神生誕寺院⁽⁴⁾の前の食堂で朝食。運転手は、本日の目的地の一つマート村(Mat or Mant)への行き方を尋ねている。

9時25分、州立マトゥラー博物館に到着。ところが、ストのため臨時閉館

(4) Shree Krishna Jannam Bhūmi



図7 ヤムナー川のボート



図8 蛇使い

であった。急遽予定を変更し、翌日に訪問することとする。オートリキシャーに乗り換えて、ヤムナー川の沐浴地（ガート）を見に行く。9時55分、手漕ぎのボートを雇って、上流まで上り、川から聖地マトゥラーのガートを見る（図7）。陸に上がり参道散策。切り紙細工屋、蛇使い（図8）、裸の行者と遭遇。本特集トップページの挿絵となった（描画：福光文）古くからあるラッスィー屋で濃厚なラッスィーで喉を潤す。

11時38分、博物館に戻り、待たせておいたワゴンでマートへ出発。クシャーン時代重要な

神殿があったとされ、カニシュカ王像をはじめ多くの出土品で有名である。もう一度ヤムナー川を渡りなおし、乗ってきた列車でラクナウへ戻る方向へ進む。鉄道線路を左折し、マート村に着くが、発掘現場の跡は見つからなかった。12時55分、マート出発、アーグラへ向かう。

14時、ハイウェイ沿いのドライブイン（ダーバー）で、昼食。15時3分出発、15時58分、タージマハルの入り口タージガンジ Taj Gunj 着。車は入れないので、待ち合わせ時間と場所を指定して分かれる。徒歩で、既知のホテル・シッダールタを訪ねるが満室。シャージャハーン・ホテルに変更してチェックイン、今までで最も安いが、タージマハルに近く便利。17時05分、日没までにアーグラ城を見学するため出発。17時8分、アーグラ城到着、外国人は750ルピーもする。見学中に前田が目の近くを蜂に刺され負傷。18

時20分、ホテル着。休憩。

夕食は各自自由。村山のムスリム友人アリフ氏 Arif 宅で家庭料理、バザールの食堂など。

2月25日 アーグラ～ニューデリー Agra (Taj Mahal), Mathura Museum, New Delhi

6時半集合。徒歩でタージマハルへ。1人750ルピー。8時半までゆっくりと朝日で輝くタージマハル見学(図9)。南門近くのツーリスト食堂で朝食。9時57分、ワゴンでマトゥラー博物館へ出発。11時15分、博物館着。開館してほっとする。入館料25ルピー、カメラ券20ルピー、良心的である。マトゥラー博物館調査(図10)。収蔵庫の中も見せてもらえる。報告会のポスター(図1)にもお出ましいただいた、有名な一角仙人像(リシュヤシュリンガ)はそこに横たわっ

ていた。13時01分、博物館出発、デリーへGTロードを走る。13時21分、左手に大きな寺院が見える。ジャイ・グルデーヴ寺院で、ビートルズの Across the Universe に歌われている聖者だ。13時28分、ドライブインで昼食、今までで一番まずかった。14時39分、出発。17時15分、ニューデリー着。地下鉄工事で交通規制が敷かれており、ホテル前まで車が入れない。エアインディア事務所に行く前田とはホテルで合流することとして、徒歩でコンノートサークルへ。



図9 朝のタージマハル



図10 マトゥラー博物館にて

15分後、ホテル・セントラル・コート着。各自自由。

2月26日 New Delhi, Chandigarh

二手に分かれて調査活動。前田、佐藤、萩野は7時45分ニューデリー発シヤタブディー急行 Shatabdi Exp. でチャンディイーガルへ。チャンディイーガルはパンジャーブ州とハーリアナ州の州都として人工的に作られた都市である。印・パ分離独立時にガンダーラ美術のコレクションも二分された。パキスタンはラホールに、インドではチャンディイーガルの博物館に収蔵されている。

ニューデリーに残った村山、東、福光は資料整理および後半部の資料収集活動。

2月27日 New Delhi

ニューデリー国立博物館調査。各自自由行動。デリー大学留学生石川まゆみ氏来訪。デリーの情報を教えてくれる。夕食は、今夜パリへ帰る佐藤の送別会と打ち上げを兼ね、料理に詳しい石川氏を加えてアンベール・レストランでタンドール料理。23時、空港へ向かう佐藤を、エアポートバス乗り場で見送る。後日、無事フランス到着の知らせを受けとる。

2月28日 New Delhi

朝食はニューデリー駅前の食堂街で。学生3人は、そのままパハールガンジにホテル探しに行く。旅行者で非常に混んでいた中、ホテル・スタービュー Hotel Star View を探し出し予約する。前田、帰国。アジア料理を研究する原田姉妹⁽⁵⁾来訪。インド、ネパールの食文化について意見交換。

2月29日 New Delhi

ホテル移動。旅行者が集まるメインバザールことパハールガンジへ。終日自由行動。村山、福光はプラーナ・キラー(「マハーバーラタ」の都インドラプラスタと呼ばれている)、民俗工芸博物館 Folk Craft Museum 見学。

3月1日 Old Delhi

オールドデリー見学。デリー城は休館。デリー城前の月光大路(Chandni Chowk)を散策し、スィク教寺院グルドワラー見学。本屋街をめぐって、

(5) 原田のぞみ、麻由子両氏はレストラン「民風」を経営し、料理教室講師も務める。

ジャーマスジッド（モスク）へ。ムガル帝国が作った旧シャージャハーナーバード（シャージャハーン皇帝の都）を歩く。ムガル宮廷料理の伝統を庶民に伝えるカリーム・レストランで昼食。ダリヤーガンジ出版社街へと歩く。途中、ホーリー祭が近く興奮したいはずら小僧に水を浴びせられる。ダリヤーガンジでは、マノーハル出版 Manohar Book とオックスフォード大学出版を訪ねて、書籍購入。

3月2日 New Delhi

各自自由行動。村山、体調を崩す。撮影済みのビデオテープを託され福光帰国。

3月3日 New Delhi

早朝5時、ラージャスターン州へ向け出発予定であったが、東が体調不良。旅程変更し、ラージャスターンを割愛し、グジャラート州だけの調査とする。萩野、ニューデリー駅へ列車の予約に行き、西部急行（Pashchin Exp）3月4日夕方発の2等寝台をとってくる。村山、国立音楽演劇舞踊アカデミー訪問。グジャラートの黒人芸能について資料収集活動。

この後の3月4日以降の活動記録は、くり返すが前述した松枝・東そして村山報告を御覧いただきたい。

調査日程（前半）

2月18日	Tokyo → New Delhi, Paris → New Delhi
2月19日	New Delhi → Patna (Bihar State)
2月20日	Patna → Gaya → Bodhgaya
2月21日	Bodhgaya, Sujata Village → Gaya → (Lucknow)
2月22日	→ Lucknow (Uttar Pradesh State)
2月23日	Lucknow → (Mathura)
2月24日	Mathura → Mat → Agra
2月25日	Agra → Mathura → New Delhi
2月26日	New Delhi → Chandigarh → New Delhi
2月27日	New Delhi, New Delhi → Paris via Vienna
2月28日	New Delhi → Tokyo
2月29日	New Delhi
～3月04日	New Delhi

（文責：村山和之）